

2023年12月18日

立教大学国際学術研究交流制度  
2023年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	21世紀社会デザイン研究科・教授
	氏名	長 有紀枝
受入学部・研究科・研究所		21世紀社会デザイン研究科
招へい 研究員	所属・職	Professor, Department of Art, Art History & Visual Studies, Duke University 所属機関所在国：米国
	氏名	Gennifer WEISENFELD
招へい期間		2023年11月6日～2023年11月19日（14日間）
研究経費		616,260円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2023年10月23日	来日（私費にて滞在を前倒し）
2023年11月8日	公開講演会配布資料の作成・打ち合わせ
2023年11月10日	公開講演会【関東大震災から100年】「視覚化された破壊と再生の記録からみる関東大震災—追悼・展示と表象・差別・ダークツーリズム」開催。8号館1階8101教室。学内外から160名の申し込みがあり、対面・オンラインで約100名が参加した。
2023年11月10日	21世紀社会デザイン研究科教員および大学院生との意見交換
2023年11月14日	西原廉太総長表敬訪問（於総長室）
2023年11月15日	研究会「大規模災害における多数遺体の埋火葬再考～仮埋葬の必要性和社会的受容性～」開催。マキムホール（15号館）3階M302教室。本学教員および社会デザイン研究所所員など5名が参加した。
2023年11月15日	本学教員との意見交換会（於ライフスナイダー館）
2023年11月17日	旧江戸川乱歩邸を見学した。
2023年11月17日	公開講演会「ガスマスク国家：戦時中の日本の防空の視覚文化と現代日本」開催。太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム。学内外より110名の申し込みがあり、対面・オンラインで約70名が参加した。
2023年11月19日	離日

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

#### 1. 公開講演会【関東大震災から 100 年】「視覚化された破壊と再生の記録からみる関東大震災—追悼・展示と表象・差別・ダークツーリズム」

- ・ワイゼンフェルド教授は、パノラマ写真、版画、絵葉書、内外の雑誌記事、風刺画および江戸時代の鯰絵など、多数のスライドを効果的に使用しながら、関東大震災という未曾有の大災害とその表象、それらを利用した国家政策等について、視覚文化論の視点から貴重な講演を行った。発生から 12 年を経た東日本大震災という大災害の表象にも触れ、時代を超えた災害表象の共通性を指摘し関東大震災から 100 年の節目にふさわしい講演となった。
- ・使用されたスライドは 50 点を超えた。ワイゼンフェルド教授は、「客観性と主観性が分ち難く融合した」作品群を通じて、関東大震災発生当時の破壊と火災旋風による惨状、およびその後の復興状況や人々の暮らし、国内外の報道、日本人にとっての地震のとらえ方など、生々しく、あるいきは生き生きと伝え、会場からどよめきもあがった。作品には朝鮮人虐殺の様を描いた小学生のクレヨン画も含まれた。
- ・講演後は、本講演会のベースとなったワイゼンフェルド教授の著作 *Imaging Disaster: Tokyo and the Visual Culture of Japan's Great Earthquake of 1923*. Berkeley, University of California Press, 2012. の邦訳版『関東大震災の想像力—災害と復興の視覚文化論』の訳者で、本学兼任講師（現代心理学部映像身体学科）の篠儀直子氏が、講演内容を振り返りつつコメントを行った。篠儀氏は、ワイゼンフェルド教授が冒頭で行った自身の関心のありかの表明「大災害にまつわる私たちの経験や歴史的な理解を、視覚文化がどのように伝達するのか、災害のイメージが生み出されたあと、それがどのような過程を経て、ある主題をあらゆる語彙や、約束事となり、だれでもが認識可能な意味をそなえていくのか、そして個別の事例が、どのようにして普遍性を兼ね備える事例ともなっていくのか」に触れ、その関心の意義や、時代背景を解説、講演全体の重要な解題となった。
- ・対面およびオンラインの参加者には、学内外の学生のほかに、本学の教職員、学外の研究者、一般、メディアや美術館関係者など、様々な層が含まれた。博士課程後期課程の学生からは、ワイゼンフェルド教授の講演への理解が、篠儀氏のコメントにより一層深まった、という教育的効果を指摘する感想も寄せられた。



## 2. 研究会（非公開）「大規模災害における多数遺体の埋火葬再考～仮埋葬の必要性と社会的受容性～」

- ・ 発表者のほか、ワイゼンフェルド教授と 21 世紀社会デザイン研究科の教員 2 名、学外の専門家 1 名の計 5 名による非公開の研究会において、社会デザイン研究所の研究者・山形真紀が、東日本大震災をはじめとする大規模災害時の、多数遺体の埋火葬について、統計資料や、独自の調査に基づく報告を行った。
- ・ 報告は 2 部構成で、1 部で東日本大震災における多数遺体の仮埋葬と想定外の全面改葬の過酷な実情と教訓、2 部で今後発生が予想される大規模災害時の多数遺体の対処の埋

火葬、とくに現在の防災行政で基本方針となっている、地元火葬や広域火葬の課題について、報告された。

- ・ 発表者に対し、ワイゼンフェルド教授より、関東大震災時の遺体の処理状況や関連する米国内の研究動向について、非常に示唆に富んだコメントが寄せられた。また「仮埋葬」という概念の文化的、宗教的背景についても、集中的な議論がなされた。
- ・ 本研究会の成果は、社会デザイン研究所の研究プロジェクト「大規模自然災害および戦争・紛争・重大な人権侵害による大量・多数遺体の処置に関する研究」に活かしてゆく。



### 3. 旧江戸川乱歩邸を見学

ワイゼンフェルド教授は、後述の近著において、空襲に備えた「灯火管制」や空襲への恐怖の中での人々の日常を描いた象徴的作品として、江戸川乱歩作品「防空壕」を紹介している。乱歩自身、「防空壕」あとがきで、「B29の空襲を恐怖するよりは、夜の夜空の美しさにうたれたことを書いた」（江戸川乱歩全集第19巻『十字路』33頁、光文社）としているが、本学ゆかりの乱歩邸およびその土蔵（書庫）の見学は、「ガスマスク国家」講演会のみならず、ワイゼンフェルド教授の研究にも大きな意味をもった。

### 4. 公開講演会「ガスマスク国家：戦時中の日本の防空の視覚文化と現代日本」開催。

- ・ 近代日本の視覚文化とその表象研究を専門とするワイゼンフェルド教授は、関東大震災をはじめとする、日本におけるカストロフィの視覚と表象研究で名高いが、近年精力的な研究で注目されるのが、戦時日本における国民防空（民防空）の視覚表現に関する研究である。本講演会で教授は、近著『ガスマスク国家』（*Gas Mask Nation: Visualizing Civil Air Defense in Wartime Japan*, Chicago: University of Chicago Press, 2023）をもとに、35枚におよぶスライドを使用して、1930年代以降、戦域が大陸から太平洋全域に拡大し、銃後が総動員され、軍国主義に染まっていく時代の銃後の人々の暮らしを、芸術作品、写真、映画、雑誌、絵葉書、漫画や広告、日用品、政府作成のポスターなど視

覚文化の視点から論じた。

- ・ 講演会の冒頭では、防空演習としてガスマスクをつけて都心を行進する女子学生の姿をとらえた写真家・堀野正雄による「ガスマスク行進、東京」（1936年東京都写真美術館所蔵）が紹介され、馴染みのない参加者の大きな関心を呼んだ。教授は、キャラメルにおまけとしてつけられた、子ども用の紙製ガスマスクや防空ファッション、多様な防空商品などを紹介し、恐怖と不安の中であってなお、楽しみとモダンな大衆文化が存続し、非常時にアンビバレントな欲望をも生み出していた当時の状況を分析した。また、1930年代から終戦までの、飛行機へのあこがれと航空写真がもたらす視覚的な喜びと空襲に対する実存的な恐怖、それらを融合させた日本の「航空志向」についても多角的に論じられた。
- ・ ワイゼンフェルド教授の講演後、著書『ガスマスク国家』の謝辞でも紹介された、研究者であり、コレクターでもある田村英紀氏が自身のコレクションから、『ガスマスク国家』の印象的な表紙に見られる女学生が装着しているガスマスクと同型のガスマスクの実物を紹介くださった。このガスマスクは、田村氏所蔵の、防空とガスマスクの普及を目的とした当時の雑誌とともに、対面の参加者に順次供覧され、参加者自らが、直接、現物を見、手に取ることができる貴重な機会となった。
- ・ 参加者には、学内外の学生、本学の教職員、学外の研究者や美術家のほかに、防衛省関係者も含まれた。また、歴史で当時の状況を学び始めたという小学6年生の姿もあり、100分におよぶ講演会を興味深そうに聞いている姿が印象的であった。
- ・ ワイゼンフェルド教授の講演を通じ、現在知られる戦後の日本の姿が、いかに限定されたものであるのか、同時に、どのような社会が戦争を支え、また戦争によって、どのような社会が破壊されたのかを、目の当たりにすることとなった。





